



千葉県のあゆみ



古代（縄文時代～平安時代前期）

豊かな自然環境を示す貝塚

貝塚は、貝殻や骨、壊れた土器や装飾品などの捨て場であったとともに、人骨を葬るための神聖な場所であった。千葉県は日本で最も貝塚がある県であり、その数約700か所、全国のおよそ1/3を占める「貝塚の宝庫」だ。千葉県に貝塚が多いのは、東京湾の緩やかな潮の流れや干潟が発達する地形などにより、魚貝類が採集しやすい環境だったためではないかと考えられている。縄文時代は現在より海岸線が内陸側に入り込んでいたことから、海産物を豊富に収穫できたのであろう。つまり、貝塚の存在は当時から千葉県が自然環境に恵まれ、食材が豊富だったことの象徴であり、縄文時代から人が住みやすい場所だったことを想像させる。

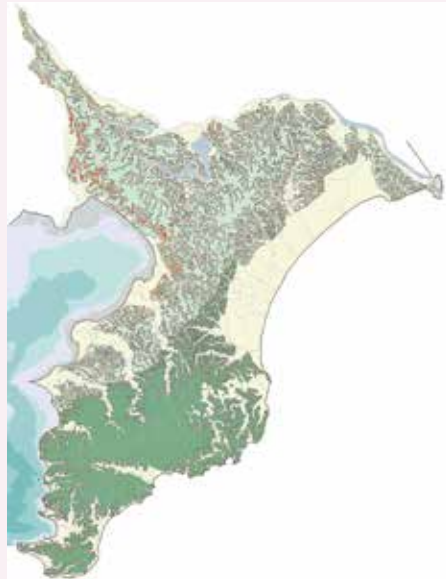


加曽利貝塚 / 千葉市立加曽利貝塚博物館

加曽利貝塚が特別史跡に

千葉市の加曽利貝塚は、2017（平成29）年に国の特別史跡に指定された。

※赤点が貝塚



千葉県の貝塚 / 千葉市埋蔵文化財調査センター

縄文時代における千葉の貝塚の位置

千葉県内の貝塚は、東京湾岸沿いに多く分布している。千葉県の東京湾岸は、全国一の貝塚密集地帯として知られている。千葉県は東京湾に面しているだけでなく、川や森林にも恵まれ、漁撈や狩猟に適した場所であったため、多くの集落が生まれ、貝塚の数も増えていった。なかでも加曽利貝塚（千葉市）は、日本最大級の規模を誇り、約7000年前から約2500年前までの生活の痕跡が残されている。

前方後円墳の数は日本一 日本屈指の古墳地帯

古墳は、3世紀中頃から7世紀初めまで造られた当時の階層の高い人々のお墓である。千葉県は全国で4番目に古墳の数が多く、特に前方後円墳の数は日本一である。2016（平成28）年時点で、古墳の数は12,765基、前方後円墳の数は700基を超える数が確認されている。では、なぜこんなにも多くの古墳が千葉に遺されているのだろうか。諸説あるが、中央政権（ヤマト王権）にとって、千葉県は東北進出を図る際に重要な拠点であったことから、結びつきを強固にするために大王と同じ形の古墳を造ることを許したとの説がある。さらに豪族より下の階層の者にも小型の前方後円墳の造営を認めたことから、その数を伸ばしていったと見られる。



内裏塚古墳 / 富津市教育委員会

南関東最大の前方後円墳「内裏塚古墳」

古墳時代中期に築造された内裏塚古墳（富津市）は、全長185mで、南関東最大の前方後円墳である。墳丘には埴輪がめぐり、2基発掘された竪穴式の石室からは人骨や銅鏡の他、全国でも珍しい金銅製の胡録金具（矢を入れて携帯するための道具）等が見つかっている。

房総三国が舞台となった 武士の反乱

701（大宝元）年に大宝律令が成立し、地方行政は国・郡・里の3段階の行政区画に整理された。千葉県は、主に「総の国」と呼ばれる地域であったが、南側を「上総国」、北側を「下総国」と改められ、718（養老2）年には上総国の南部4郡を分割して「安房国」が設置され、房総三国が成立した。平安時代に入ると、今までの律令体制は衰退の一途を辿り、武士の台頭が目立つようになる。有名な武士の反乱として、房総も舞台となった935（承平5）年の平将門の乱、1028（長元元）年の平忠常の乱が挙げられる。これらの乱は鎮圧されたものの、忠常の子孫である千葉氏や上総氏は処罰を逃れて勢力を伸ばし、房総全体に力を広げていった。



下総国絵図 / 国立公文書館デジタルアーカイブ (<https://www.digital.archives.go.jp/>)

当時の地理や行政区分を記した絵図

『下総国絵図』は江戸時代に作成された、当時の地理や行政区分を記した古絵図。下総国は現在の千葉県北側に位置し、平将門の本拠地である下総国相馬郡の郡域は現在の茨城県域にまたがっていた。

上総国から始まる『更級日記』

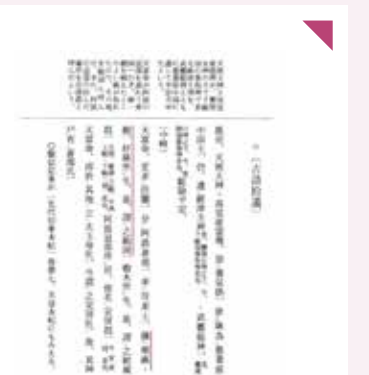
上総国は、全国に3か所しかない国司を親王が務める「親王任国」と呼ばれる由緒ある大国だ。残念ながら当時の国庁跡は残っていないが、当時造営された国分寺は、七重塔を備えており、現存する礎石の位置から、初重で一辺36尺（約10m）、高さ60mを超える超高層建築だったと推定されている。また、国分尼寺の跡は、発掘調査で発見され、中門、回廊などが当時の建築様式のまま復元されており、国分寺・国分尼寺ともに全国最大規模を誇る。平安時代後期に菅原孝標女によって記された『更級日記』には上総の国司代理の任を終えた父親と共に、都へと旅立つ13歳の多感な少女が見た、当時の房総の姿が描かれている。



市原市が上総国の政治や文化の中心であったことを象徴する「史跡上総国分尼寺跡」/ 市原市教育委員会

「千葉」と「ふさの国」の由来

「千葉」の名前の由来については諸説あるが、8世紀後半に成立したとされる『万葉集』の中に「知波乃奴乃（千葉の野の）」との記述がみえ、奈良時代には地名として既に存在していたことが分かる。また、「ふさの国」の由来は、平安時代初期に編纂された『古語拾遺』によると、古代に四国の阿波から移住した忌部が房総半島で麻を植えたところ良く育ったので、麻の別名「ふさ」の名を取って、「ふさの国」と名付けたことによるという。また、飛鳥時代の木簡によると、上総は「上掾」と記し、「掾」という漢字は「房をなして稔る果実」という意味をもった。『古事記』『日本書紀』の伝承でヤマトタケルが船で房総半島をめぐって北上したように、古代人は房総半島の形が房状であることを知っていたため、「ふさの国」と名付けたのではないかと推測されている。



古語拾遺（『千葉県の歴史』資料編古代より転載）

中世(平安時代後期～戦国時代)

千葉氏のはじまり

千葉氏は、高望王(桓武天皇のひ孫)の子・平良文を祖とする桓武平氏の一族である。その子孫にあたる平常重が1126(大治元)年に上総国山辺郡の大椎から下総国千葉郡の千葉庄に拠点を移したことから、千葉氏を称するようになったとされる。千葉氏はこれ以後約330年にわたり同地を拠点とすることになる。その後、1135(保延元)年に常重は子・常胤に家督を譲る。常胤が所領支配を安定させるために頼ったのが、源義朝(頼朝の父)であった。義朝と主従関係を結んだことで支配は安定するかに見えたが、1160(永暦元)年の平治の乱で義朝が平清盛に敗れたことで、先祖伝来の所領である相馬御厨を国衙に没収され、千葉氏の影響力は低下してしまう。常胤にとって転機となったのが、1180(治承4)年の源頼朝挙兵であった。



源頼朝と伝わる坐像
鎌倉時代・13～14世紀制作 / 東京国立博物館所蔵



千葉氏中興の祖と言われる常胤の木像
「千葉介常胤像」 / 安西順一作 / 千葉市立郷土博物館所蔵

千葉常胤の活躍

頼朝は伊豆で挙兵した後、相模国石橋山で平家方との戦いに大敗して安房に逃れてきたが、この頼朝のもとにいち早く駆け付け、味方をする意向を示したのが常胤であった。房総で再起を果たした頼朝は大軍を率いて鎌倉へ入るが、頼朝に対して鎌倉に本拠を構えることを進言したのも常胤であった。1180(治承4)年当時、常胤は63歳であり、33歳の頼朝は常胤を父のように慕ったといわれている。その後も常胤は鎌倉幕府の創設を支え、奥州合戦に参加する等活躍し、全国20数カ所の広大な所領を獲得する。幕府内で御家人の地位も得て、千葉一族の勢力を盛り返すことに成功したのであり、千葉氏の中興の祖といわれている。常胤には、惣領(千葉介)の胤正を筆頭に6人の息子がおり、後に「千葉六党」と呼ばれる武士団を形成していった。東北から九州まで各地に点在する所領は息子らが分割して引き継ぎ、全国各地に広がりを見せた。

千葉氏の衰退とその後

鎌倉幕府は1333(元弘3/正慶2)年に滅亡し、程なく1336(建武3)年に室町幕府が成立した。京を本拠地とする室町幕府は、関東支配の拠点として鎌倉府を設置したが、次第に長官である鎌倉公方(足利氏)と補佐役の関東管領(上杉氏)が対立するようになり、ついには関東一円を巻き込む享徳の乱へと発展した。東日本における戦国時代の始まりとも言われる。これにより千葉一族も公方派と管領派に分かれて争うこととなった。1455(康正元)年には管領派の当主胤直が滅ぼされ、公方派の一族馬加康胤が当主となった。その後、鎌倉公方の後身である古河公方と結んだ千葉宗家は本佐倉城(現佐倉市・酒々井町)を築城し、新たな本拠地とした。戦国時代後期になると小田原北条氏の支配下に入り、小弓公方や安房の里見氏と対立した。1590(天正18)年、豊臣秀吉が小田原城攻めにより北条氏を滅ぼすと、千葉氏も所領を没収されて滅亡し、約470年にわたる下総国を中心とした支配は終焉を迎えた。

現在、千葉氏ゆかりの地には北斗七星を神格化した妙見菩薩を祀る寺社が多く見られる。千葉氏を導く軍神として信仰された妙見菩薩は、一族結束の象徴として、各地に特徴的な菩薩像や星を表す紋様をあしらった建築や文化財を残している。



千葉氏に関する資料も展示 / 千葉市立郷土博物館



平忠常の創建と伝わる千葉神社。主祭神は、千葉氏が厚く信仰した北辰妙見尊星王(天之御中主之神)。通称「妙見様」 / 千葉神社

千葉氏の末裔 新渡戸稲造



新渡戸稲造 / 国立国会図書館「近代日本人の肖像」(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)

鎌倉時代からの歴史を持つ千葉氏には多くの子孫がいたが、江戸時代以降に活躍した人物の一人として、新渡戸稲造が挙げられる。

新渡戸家は、千葉常胤の孫・常秀を祖とするといわれている。常秀が源頼朝から与えられた下野国新渡戸にルーツがあり、その後南部藩に仕えた一族であるという。稲造はそのような家にあつて、盛岡で生まれた。

稲造は教育者、思想家、農学・法学博士として活躍し、日本の武士道を海外に紹介した著書『武士道』は、アメリカのセオドア・ルーズベルト大統領やケネディ大統領に高く評価された。また、国際連盟の事務次長を7年間務めるとともに、東京女子大学の初代学長になる等、女性教育にも力を注ぎ、佐倉藩士の父を持つ津田梅子創立の女子英学塾(現津田塾大学)でも顧問を務めた。かつての5千円札の肖像に採用されていた新渡戸稲造は、新5千円札の肖像に採用された津田梅子と縁があった。

千葉県出身・日蓮ゆかりの寺院

日蓮宗は、鎌倉時代に活動した僧日蓮を開祖として成立した仏教宗派である。法華経を絶対的な教えとし、法華経こそが仏教の真髄であると強調し、「南無妙法蓮華経」の題目を唱えることで悟りに達することを目指している。日蓮は、1222（貞応元）年に安房国小湊（現鴨川市小湊）に漁師の子として生まれた。彼は幼少期から仏教に深い関心を持ち、様々な教を学んだ後、法華経に目覚め、布教することを決意した。県内には日蓮と関わりの深い寺院が多く、日蓮宗大本山が全7寺中3寺存在する。日蓮誕生の地を記念した「誕生寺」（鴨川市）、出家得度した「清澄寺」（鴨川市）、日蓮宗で最初に建てられたとされる「中山法華経寺」（市川市）の3寺である。それぞれ日蓮宗の重要な霊場であり、今も多くの参拝者が訪れている。



誕生寺本堂 / 大本山小湊誕生寺

日蓮の生家跡に弟子・日家が建立した日蓮宗の大本山・誕生寺（鴨川市小湊）。日蓮誕生の地である本県には、日蓮ゆかりのスポットが多数点在する

戦国大名・房総里見氏の活躍

房総半島の南部、安房国を拠点とした戦国大名が房総里見氏である。最盛期には安房国から上総国の大部分、下総国の一部までを支配した。上野国（現群馬県）を本拠地とする源氏の支流新田氏の一族である里見氏は、15世紀後半の鎌倉府体制内での抗争の際、公方の側近であったため房総に派遣され、現地の勢力と結びついて安房国に入り、戦国大名としての基盤を築いた。1533（天文2）年、天文の内乱を克服した里見義堯は、上総国を勢力下に加える中で東京湾を挟んだ対岸の小田原北条氏と対立するようになる。広大な領国を持つ北条氏により、何度も領国へ侵攻されながらも、東京湾の水運を押さえ、1566（永禄9）年の三船山合戦（現富津市）では義堯の子・義弘が北条軍を破るなど、1577（天正5）年に和睦するまで30年以上にわたり対立を続けた。その後、1590（天正18）年に豊臣秀吉が北条氏を滅ぼした後も安房の大名として存続したが、1614（慶長19）年に江戸幕府の権力争いに巻き込まれる形で伯耆国（現鳥取県）へ国替えされてしまう。そして、1622（元和8）年に当主忠義



版画「里見左馬頭義弘相州城ヶ島にて北条と戦ふ」 / 館山市立博物館

が29歳の若さで病死したことで後継者不在を理由に改易されてしまう。房総里見氏の本拠地であった安房では、現在に至るまで様々な顕彰・保存運動が行われた結果、多くの史跡が残されている。

鎌倉時代の伝説が残る「鯛の浦」



鯛の浦 / 鴨川市

鴨川市小湊の海域である「鯛の浦」は、代々禁漁とされてきたが、1903（明治36）年に漁業法に基づく禁漁区となり、1922（大正11）年に「鯛の浦タイ生息地」として国の特別天然記念物に指定された。鎌倉時代に日蓮が誕生した際、本来深海にすむ回遊魚で群れないはずのタイが大小の群れをなして海面近くに現れたという伝説が残っている。この不思議な伝説は、「三奇瑞」の一つとして今も語り継がれているが、現在も「鯛の浦」のタイは水深10～15mという浅い海に群れをなす生態を示し続けている。「鯛の浦」では、現在遊覧船が運航され、タイが群れで泳ぐ姿を鑑賞することができる。

ベストセラー『南総里見八犬伝』

『南総里見八犬伝』は、江戸時代の戯作者曲亭馬琴によって28年の歳月をかけて執筆された、房総半島を舞台とする全106冊に及ぶ長編小説である。里見氏の歴史を題材にしているものの、内容は歴史的事実ではなく、馬琴による創作である。物語の中心は、八犬士と呼ばれる8人の若者であり、それぞれが神秘的な力を持つ。八犬士の成長や絆を描いた物語には、房総の風景や文化が色濃く反映されている。この作品は、文学や歌舞伎のみならず、後世の様々な創作物に影響を与えている。



歌川国芳『本朝水滸伝剛勇八百人一個 犬江親兵衛』 / 館山市立博物館



『南総里見八犬傳』 / 専修大学図書館所蔵

近世(江戸時代)

利根川東遷事業と銚子の醤油

江戸時代初期、幕府主導でさまざまな再開発が実施されたが、そのひとつが、関東の治水と水運の整備であった。なかでも東京湾に注いでいた利根川は数度の瀬替え工事の結果、銚子を河口とする流れに遷された。このことを総称して「利根川東遷」と呼ぶ。これによって、東北から江戸への大量輸送が可能となった。

この時期の銚子を代表する特産品としては醤油が挙げられるが、その他にも野田の醤油、流山のみりん、流域の蔵元で作られる酒などが生まれ、大都市江戸の食文化を支えたのである。これらは今日のヤマサ、ヒゲタ、キッコーマン、万上などのブランドとしてその名を残している。



しょうゆ味わい体験館 / ヤマサ醤油株式会社

各地に残された房総の「牧」跡

「牧」とは、馬を放牧・捕獲するための場所である。江戸時代になると、「小金牧」「佐倉牧」「嶺岡牧」の広大な三つの牧が設けられた。馬は牧で放し飼いにされていたが、牧場内の野馬を集める「野馬捕り」によって、良馬を選び、飼育・調教された後にさらに選別されて江戸へ送られた。房総に牧が置かれていた形跡は、各地に残された「捕込」(野馬捕りの際に用いられる土手囲い)跡や「野馬土手」(馬が逃げ出さないように作られた土手)跡に見ることができる。



国指定史跡下総小金中野牧跡(捕込) / 「房総の牧」ホームページ



小間子牧野馬捕込跡 / 「房総の牧」ホームページ



嶺岡牧東馬捕場 / 鴨川市教育委員会

徳川家康が鷹狩をした東金

江戸幕府の初代将軍徳川家康は、東金に二度来訪している。その目的は「鷹狩」であった。「鷹狩」とは、飼いならした鷹などの猛禽を操って狩りを行うことである。家康は関東各地で鷹狩を行い、千葉では九十九里浜沿いの上総・下総にまたがる広大な領域を鷹狩を行う鷹場に設定した。さらに家康は「御成街道」を整備した。「御成街道」は、船橋から千葉を通り、東金を結ぶ街道であり、現在も道筋がほぼ当時のまま残っている。街道の終点である東金には「東金御殿」も建てられ、「八鶴湖」は、東金御殿の庭池として造成されたといわれている。このように様々な面で家康の痕跡をうかがうことができる。



東金の御成街道 / 東金市



八鶴湖 / 東金市

成田山新勝寺の参詣ブーム

縁起によれば940(天慶3)年、平安時代に開山したとされる成田山新勝寺。江戸時代になると、庶民の間で「成田詣」がブームとなる。それに一役買ったのが、人気歌舞伎俳優の初代・市川團十郎だ。子宝に恵まれなかった團十郎は、1687(貞享4)年、成田山新勝寺に通い祈願を続けたところ、翌年に長男を授かる。この出来事から團十郎は成田山を厚く信仰し、屋号を「成田屋」としたという。さらに、團十郎はこのエピソードを歌舞伎の演目「成田山分身不動」として上演。この演目も追い風となって「成田詣」の人気に拍車がかかり、江戸からも気軽に参詣できる名所となった。



成田山開帳参詣群集之夕景 / 大本山成田山新勝寺



成田山総門 / 大本山成田山新勝寺

日本地図の父・伊能忠敬

初の実測日本地図を完成させた伊能忠敬は、1745(延享2)年、上総国山辺郡小関村(現九十九里町小関)に生まれた。17歳で香取郡佐原村(現香取市佐原)の豪商伊能家に婿入りして以降は、隠居まで家業に専念しており、家督を譲って隠居した後、50歳にして学んだ暦学の延長で、江戸と蝦夷地の測量をすることになった。忠敬は17年かけて日本各地を歩き回り、その距離は地球一周分にも及ぶ約4万kmにも及んだが、結局地図の完成を待たずしてこの世を去ることとなってしまった。弟子たちが完成させた「大日本沿海輿地全図」は極めて精緻な仕上がりとなり、明治以降国内の基本図の一翼を担うものとなった。

伊能忠敬像 / 香取市伊能忠敬記念館所蔵



とよはし樋橋の上から見た伊能忠敬旧宅 / 香取市教育委員会

江戸幕府を支えた房総の老中たち

老中は将軍に直属する江戸幕府の最高職である。多くの千葉県(安房・上総・下総)出身の大名が老中を務めた。これは、江戸の近隣にあり、徳川家の信頼が厚い家が配置されたためだと考えられる。ここでは特に幕末期の房総出身老中3名を紹介する。一人目は、佐倉藩主堀田正睦である。正睦は二度老中に就任したが、二度目の就任時に1858(安政5)年の日米修好通商条約の調印に尽力した。また、藩政改革を行い、蘭学を積極的に導入したことで有名である。二人目は、関宿藩主久世広周である。朝廷との関係をめぐり大老井伊直弼と対立し、直弼の死後、朝廷と幕府の融和路線を探る公武合体政策を推し進め、1860(万延元)年に孝明天皇の妹・和宮を十四代将軍徳川家茂の夫人として迎えた。三人目は、大多喜藩主大河内(松平)正質である。1868(慶応4)年、新政府軍との鳥羽・伏見の戦いで、総督として幕府軍を指揮した。このように房総出身の老中が政権を支えていた。



大河内正質(左) / 千葉県立中央博物館大多喜分館